

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究（A）

研究期間：2010～2012

課題番号：22683016

研究課題名（和文） 不妊夫婦の喪失と葛藤，その支援 見えない選択径路を可視化する質的研究法の展開

研究課題名（英文） Loss and Conflict in Infertile Couples: Qualitative Research on Invisible Choice Trajectories and Support

研究代表者

安田 裕子（YASUDA YUKO）

立命館大学・衣笠総合研究機構・ポスドクトラルフェロー

研究者番号：20437180

研究成果の概要（和文）：（1）子どもを望み不妊治療をしている女性から，子どもをもつことに関する語りを経時的に聴きとり，過去の経験の意味を問い返し更新しながら未来に向かう，自己の変容と維持の過程に接近した。そして，時間的展望を得て多面的になり重層化していく自己を捉え，治療中の閉塞状況を打開しうる援助者の介入に関する示唆を得た。（2）質的研究法 TEM の応用的展開として，分岐点の概念に関し，ナラティブ・プラクティスや対話的自己論との接合などに関する4つの理論的・方法論的な成果を得た。

研究成果の概要（英文）：（1）I examined the process by which the sense of self of a woman undergoing infertility treatment was transformed and maintained via her continual reconsideration of the meaning of her experiences. Her personal narrative, told to me in chronological order, revealed the evolution of a multifaceted and continuous identity over time. It also suggested approaches for helping individuals cope with the difficulties involved in infertility treatments. （2）We collaborated to develop a qualitative research method, TEM (Trajectory Equifinality Model), which, in narrative practice and conjunction with Dialogical Self Theory and similar concepts, yielded four theoretical and methodological approaches focusing on the notion of BFP (Bifurcation Point).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2012年度	2,600,000	780,000	3,380,000
年度			
年度			
総計	8,300,000	2,490,000	10,790,000

研究分野：心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：質的研究法 TEM，不妊夫婦，喪失経験，生涯発達，ナラティブ，心理的支援，協働的实践，国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

（1）生殖補助医療の光と影 治療をやめた当事者女性のライフ（生活・人生）への留意：日本で1983年に初めて成功した体外受精，1992年に成功した顕微授精を代表とする生

殖補助医療の高度化・先端化は，望んでも受胎しない不妊夫婦の希望の拠り所となっている。しかし一方で，多胎妊娠や受精卵の廃棄など，新たな心理社会的ジレンマを生み出してもいる（Bryan & Higgins, 1995）。また，

原因がいずれにあっても治療の対象とならざるをえない女性(白井, 2004)は, 子どもをもつことができないことによる焦燥感, 母性を発揮できないという喪失感, 夫や姑・舅への責任の重圧などにより, 羨望・失望・劣等感・悲観などの情動ストレスを感じ, また, 検査や治療に伴う痛み, 治療結果に対する恐怖や不安を経験してもある(清水・千石, 1991; 森, 1995)。そして, 不妊治療が開始された時点で正式なものとなった不妊アイデンティティが, 妊娠したいと治療に積極的になることでますます自己の中核となり, 余計に不妊に対する感情を冷静に処理できなくなる人も多い(Olshansky, 1987)。このように様々に心身への苦痛が増しながらも治療技術に期待を寄せ, また, 自らのジェンダー観によって治療を施そうとする医師(柘植, 1999)との間で, 不妊治療をする選択から降りることができなくなっている女性も少なくはない。他方で, 高度な治療技術によっても妊娠・出産に至ることのない女性もいる。

こうした問題意識から, 不妊治療でも受胎しなかった女性たちの不妊治療をやめる選択に焦点をあて, 治療をやめて子どもをもたないあるいは養子を迎える選択によって, その後の人生展望や夫婦像・家族像を再構築していった不妊や不妊治療の経験を, 当事者女性の視点から時間経過に沿ってプロセスとして捉えることの重要性が認識された。

(2) 当事者経験への接近 ナラティブ・アプローチと複線径路・等至性モデル(TEM): 不妊治療を経験した女性の心理的プロセスを捉えるうえで, 語り手と聴き手の相互行為の文脈において, 経験の組織化, 物語の語り方, 多種の意味づけを重視するナラティブ・アプローチ(Bruner, 1986; やまだ, 2006)に依拠するライフストーリー・インタビューが有用である。また, 喪失を経験した場合, 人は, 過去の人生の意味を問い返し, 人生を再編し新たに生き直すことが必要となるのであり(やまだ, 2000), 「発達における喪失の意義」(やまだ, 1995)という概念により, マイナスでしかなかった不妊の経験を意味あるものに語り直そうとするありさまに光をあてることが重要であると考えられた。

そして, 不妊の経験を「不妊治療をやめる」という選択に焦点をあてて長い時間軸のなかで捉えるために, 質的研究法, 複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)が有用であると考えられた。TEMは, 文化心理学者 Valsiner (2001)の創案により, 等至性(Equifinality)の概念をもとに開発した, 人間発達や人生の歩み(径路)の多様性と複線性をプロセスとして捉える手法である。歴史的・文化的・社会的な諸力と時間経過のなかで実現する行為や

選択を等至点(等至性の顕在型)として焦点化し, 収束したり分岐したりする人生径路をプロセスとして描くための分析・思考の方法論である(サトウ・安田・木戸・高田・Valsiner, 2006)(図1を参照)。

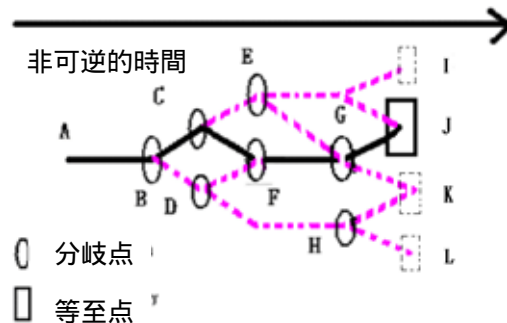


図1 TEM図

(3) 上記の背景をもとに行った研究により, 以下の3つの知見が産出された。

選択径路の可視化: 不妊夫婦の子どもをもつ選択径路を, 不妊治療と養子縁組といった社会システムへの関わり方の観点から類型化し, 選択が社会的に方向付けられているありさまを明らかにするとともに, 「不妊治療をする/しない」「養子縁組を試みる/試みない」「子どもをもつ/もたない」といった選択肢が保障されることの重要性を指摘した。

不妊に悩む人々への支援の検討:

選択肢の提示(初期) 不妊治療と養子縁組の両方の選択可能性が提示され, 当事者が自らの生活設計や人生展望に位置づけて選択できるようにすることが重要である。

喪失への対処(不妊治療中) ステイグマ視による, 疎外感と孤独感, 自尊感情の低下などの喪失には, 当事者グループによる自己表現および経験や感情の共有が効果的である。幼い頃から思い描いてきた生殖物語や理想的な家族像の喪失, 命をつなぐことができないという喪失には個人カウンセリングが有効である。喪失への対処は, 不妊治療をやめる選択への支援とも重なる。

権利擁護(不妊治療中~) 非配偶者間の不妊治療を選択する人々に対する支援のひとつとして, 子どもの視点を取り込み, 生まれてくる子どもの出自を知る権利を保障し告知のあり方を検討する必要がある。

不妊経験の社会的共有化 冊子や著書などの刊行物により, 不妊経験を広く社会的に示し, 感情の処理法や歩む方向を選択する指針を提供する。現場の直接的な支援を受けることができるか否か, 当事者であるかそうでないかに関わらず, 多くの人々がアクセスすることができ, また, 思春期・青年期における, 生殖と性と生に関する学校教育にも活用することができる。

質的研究法 TEM の有効性の検討:TEM は、選択可能性や径路を可視化し、そうしたありさまを社会的に共有するうえでのツールとなる。より具体的には、当事者の意味づけを確認する心理臨床的効用、同様の経験ををする人々への道標的効用、非当事者による当事者理解・多様性理解を促進する教育的効用がある。

以上の背景および知見の産出をもとに、次の本研究目的を設定した。

2. 研究の目的

不妊に悩む夫婦の、不妊あるいは不妊治療にまつわる喪失や葛藤に焦点をあて、心理臨床的支援に資する知見を得る。また、社会文化的な諸力のせめぎ合いを可視化するための分析・記述の方法論的枠組みである TEM の、応用・発展可能性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 理論的検討 現象理解と文献購読会：不妊夫婦の喪失と葛藤について、不妊治療経験者へのインタビューにより現象理解を行う。また、TEM に関連する知見を習得し、理論的精緻化を図る。

(2) 実践的検討 対人援助と研究協働：当事者グループの開催、海外研究協力者・クラーク大学のヴァルシナー教授とナイメーヘン大学名誉教授ハーマンス教授との協働的議論、TEM の適用の仕方を実践的に学ぶ質的研究検討会、国内外での学会発表ならびに関連・近接領域の研究者や援助者との意見交換・共有を行うなど、実践的に学ぶ多様な場を設定する。

(3) 応用的検討 支援と質的研究法 TEM の検討：理論的検討と実践的検討(1と2)をつなげ、生殖医療技術、不妊という社会文化的事象、不妊特有の喪失、夫婦葛藤などに関する知をむすび、不妊夫婦への心理臨床的支援に関わる考察を行う。また、社会文化的な諸力と時間経過とともにある現象への理解に役立つ方法として、質的研究法 TEM の展開を図る。

4. 研究成果

不妊当事者のライフに資する知見と、質的研究法 TEM に関する知見との大きく2つが産出された。

(1) 前向的(prospective)なナラティブから捉えられるライフの拡張：過去の不妊治療経験者に関する回顧的(retrospective)な語りではなく、現在子どもを望みながら治療に向き合っている女性を対象に、経時的にその経験の語りを聴き取った。そこには、今に至る

(過去の)経験の意味を問い返し更新しながら、今後(未来)に向かいゆく自己の変容と維持の過程が捉えられ、次の視点を得た。

時間的展望を得て多面的になる自己への留意：インタビューを重ねるなかで、疾患や機能低下の発見による健康な身体観の崩壊、治療の失敗、子宮外妊娠と卵管の摘出など、さまざまに喪失を経験しつつも、実子をもつことだけにこだわるのではなく、子どもの学びや育ちに関わる多様な社会的活動の場を構成していくというような、時間とともに多面的になりゆく自己の重層化する様相が捉えられた。

心理臨床的支援への示唆：治療過程にある場合、その当事者経験を捉えようとも、感情を抑制するかのようになり出来事のみが淡々と語られたり、逆に感情に揺さぶられるような混沌とした語りが吐露されたり、あるいは治療に過度なプラスの価値付けをする語りが聴き取られる、ということが多い。一方で、本研究のインタビュー協力者の語りからは、治療の渦中にあるにも関わらず、未来に向かっていく拡がりのあるライフのありさまが捉えられた。このことから、治療過程において、どのような視点のもち方や経験への意味付けのあり方が、治療の渦中における閉塞した心理状態を打開しうるのかについて、心理臨床支援に援用しうる貴重な示唆を得た。

(2) 質的研究法 TEM の理論的・方法論的展開：心理学の学問領域を越えて、さまざまな現象や当事者経験、選択や意思決定の把握に TEM が適用されるなかで、TEM の基礎概念のひとつである「分岐点」に関し、次の4つの理論的成果が産出された。

変容を捉える視点：分岐は、すなわち、そのポイントでの変容の発生を意味し、分岐点での変容を捉えるモデルとして「発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis: TLMG)」が考案された。三層には、「信念・価値観レベル」「記号レベル」「個別活動レベル」があり、順に、ピリーフ、サイン、アクティビティといった異なる発生が想定され、質的変容を、行動と信念・価値の絡み合いによって分析・記述することが可能となった。そして、発生の三層モデルが作動する時空のポイントが TEM における分岐点とむすびつけられた。なお、等至点は、歴史的・文化的・社会的に構造化されて生じたポイントであり、研究においてはその経験や出来事が抽出されることとなり、サンプリングの方法論、歴史的構造化サンプリング(Historically Structured Sampling: HSS)として理論化された。つまり、HSS によりある出来事や対象者を抽出し、システムの変容過程を TLMG で理解しつつ、非可逆的時間と文化ともにある人のライフを TEM によって描くという理

論体系を整備し、その総体を複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) とした (図2を参照)。

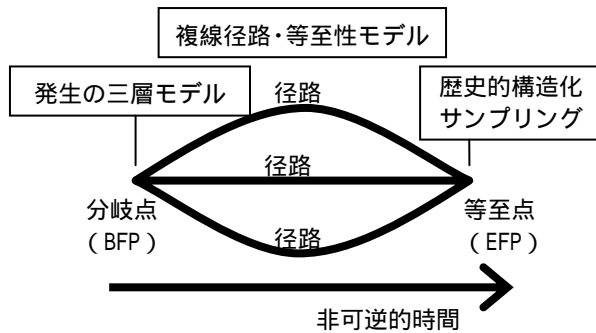


図2 TEAの構成

不定 (uncertainty) を捉える視点: 変容の前段階には未決定性のあらわれとして逡巡や揺らぎあり、そうした不定な状況は、困難の渦中にある当事者には抗し難い翻弄された状態であるかもしれない。しかし、それは同時に、変容へとむすびつく介入・支援のポイントでもある。

臨床的支援 / ナラティブ・プラクティスとの接合: 分岐点における援助者の介入・支援のありさまとして、次のことが示唆された。すなわち、援助者は、当事者が不定状況から脱する足がかりを提供したり、マスターナラティブを主体的なナラティブへと転換する宛先となるように、機能することができる。

多声的な自己の出現と場の変容: 分岐点における変容は、自己の本来的な多面性が回復し、自己の活動する場が拡がり、今後に向かう選択可能性が展望されることと、表裏一体である。

以上が本研究課題における成果の概要である。今後もこれらをもとに知見の産出に努めていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

福田茉莉、安田裕子、サトウタツヤ(編)、変容する語りを記述するための質的研究法 TEM and Narratives as Archives、共同対人援助モデル研究、査読無、6、2013、1-95

荒川歩、安田裕子、サトウタツヤ、複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例、立命館人間科学研究、査読有、25、2012、95-107

安田裕子、インタビューの相互行為におけるわからなさの可能性、共同対人援助

モデル研究、査読無、2、2011、95-101

[学会発表](計26件)

野村信威・山崎寛恵・安田裕子・深瀬裕子・やまだようこ、発達心理学における質的研究の新たな展開へ向けて、日本発達心理学会第24回大会、2013年3月17日、明治学院大学(東京都)

Yasuda, Y., Maintenance and transformation of meanings of having children for a infertility woman :with narrative approach and TEM. , THE INAUGURATION PROGRAMME, INAUGURAL SEMINARS, Seminar I METHODOLOGICAL

AFFORDANCES OF TEM, 2012年3月14日、オルボーグ(デンマーク)

安田裕子、時間のなかで重層化する不妊当事者の自己語り 不定、変容の循環のなかで、質的研究・文化心理学の交差点

ヤーン・ヴァルシナー教授を迎えてシンポジウム 日本における質的研究のカットングエッジ、2012年12月24日、立命館大学(京都府)

Yasuda, Y., How do women share infertility experiences with their partner? , 7th International Conference on the Dialogical Self, 2012年10月26日、アセンス(アメリカ)

木戸彩恵・サトウタツヤ・福田茉莉・今尾真弓・安田裕子・谷口明子・やまだようこ、病いと語りとパーソナリティ、日本パーソナリティ心理学会第21回大会、2012年10月7日、島根県民会館(島根県)

安田裕子・滑田明暢、ナイメーヘン・ラートボウト大学心理学部 名誉教授ヒューベルト・ハーマンスによる The dialogical self: Positioning and counter-positioning in a globalizing world(対話的自己 グローバル社会におけるポジショニングと反ポジショニング)の簡易通訳、日本パーソナリティ心理学会第21回大会、2012年10月6日、島根県民会館(島根県)

廣瀬真理子・長坂晟・安田裕子・番田清美・和田美香・サトウタツヤ、人間の発達変容をシステムとして捉える試み TEMを用いて、日本心理学会第76回大会、2012年9月11日、専修大学(神奈川県)

北村英哉・荒川歩・松嶋秀明・安田裕子・谷口明子・野村信威、質的研究法を心理学のなかで教える意味と方法、日本心理学会第76回大会、2012年9月11日、専修大学(神奈川県)

木戸彩恵・浦田悠・西山直子・安田裕子・

家島明彦・やまだようこ・伊藤哲司・吉永崇史、多文化横断ナラティブを生成継承する 日本の質的研究の国際化に向けて、日本質的心理学会第9回大会、2012年9月2日・東京都市大学(神奈川県)

(3)連携研究者
なし ()

研究者番号：

〔図書〕(計16件)

安田裕子、新曜社、質的アプローチの教育(質的心理学ハンドブック) 2013(印刷中)

安田裕子、晃洋書房、当事者の生(せい)に寄り添うということ 対人援助活動のさらなる連携と融合に向けて(対人援助学を拓く) 2013(印刷中)

安田裕子、丸善、うしなう 不妊・中絶(発達心理学事典) 2013(印刷中)

Yasuda, Y., Information Age Publishing, How can the diversity of human lives be expressed using TEM? :Depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment (MAKING OF THE FUTURE: The Trajectory Equifinality Model in Culture Psychology), 2013 (in press)

安田裕子、女性ライフサイクル研究所、血のつながりに依らない家族 社会的養護と生殖補助医療のなかで(女性ライフサイクル研究第22号 いま、「家族」を問う) 2012、8(p.44-51)

安田裕子、新曜社、不妊治療者の人生選択 子どもをもつことをめぐるナラティブ、2012、304

安田裕子・サトウタツヤ(編) 誠信書房、TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開、2012、264

安田裕子、ナカニシヤ出版、子どもに恵まれないこと(成人発達臨床心理学ハンドブック 個と関係性からライフサイクルを観る、2010、13(p.255-267)

〔その他〕

<https://sites.google.com/site/satozemigyoseki/home/kojin/yasuda>

6. 研究組織

(1)研究代表者

安田 裕子 (YASUDA YUKO)

立命館大学・衣笠総合研究機構・ポスドクトラルフェロー

研究者番号：20437180

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：